# 【城陽市】
# 校務ＤＸ計画

## １．校務ＤＸとは

校務ＤＸとは、教育現場におけるデジタルトランスフォーメーション（DX：Digital Transformation）のことを指します。具体的には、学校の様々な業務・教育活動を効率化・改善するために、デジタル技術を活用する取組を意味します。以下に校務ＤＸの主な取組例を挙げます。

○業務の効率化

出欠管理、成績管理、保護者連絡などの校務をデジタルシステムによって自動化・効率化する。

デジタル化されたデータを用いて、迅速に情報を共有・分析できるようにする。

○教育の質の向上

デジタル教材やオンライン学習プラットフォームを活用して、個別学習や遠隔教育を実現する。

ＩＣＴ（情報通信技術）を活用した授業で、生徒の理解度をリアルタイムで把握し、適切な指導を提供する。

○コミュニケーションの改善

教職員間、教職員と保護者間、生徒間のコミュニケーションを円滑にするためのツールを導入する。

学校と家庭の連携を強化し、教育の一環として家庭学習を支援する。

○データ活用

学習者のログや成績データを分析し、効果的な教育方法を探索する。

データに基づいて教育現場の課題を特定し、改善策を講じる。

校務ＤＸは、教育の質を高めるだけでなく、教職員の負担軽減や効率化を図ることで、教育環境全体の改善に寄与します。

## ２．本市の課題

ＩＣＴの活用が進む中、保護者と学校との連携ツール導入やそれに伴うペーパーレス化などの業務改善を進めることで、子ども一人ひとりに伴走しながら、きめ細やかな指導や支援に努めてきたところです。ただし、ＩＣＴ技術の進歩や子どもを取り巻く環境の変化は加速度的に進行しており、学校現場にとどまらない新たな視点による見直しが必要となっています。

また、日々の教育活動の内容は常に変化しており、多様化・複雑化する業務の対応により、依然として長時間勤務を行う教職員は多く、教職員の働き方改革の観点からも更なる改善が不可欠となっています。

国の「ＧＩＧＡスクール構想の下での校務の情報化に関する専門家会議」の提言や「ＧＩＧＡスクール構想の下での校務ＤＸ化チェックリスト」に基づく自己点検結果（文部科学省令和５年１１月実施）による本市の状況を踏まえ、特に本市の課題と考える次の事項について、各学校と連携を図りながら校務ＤＸの推進を図っていく必要があります。

### （１）ＧＩＧＡ環境・汎用クラウドツールの一層の活用

全ての教職員は、ＧＩＧＡ端末で、情報共有や連絡等にクラウドサービスが活用できる環境にあります。校務ＤＸ化チェックリストの結果に基づく本市の状況について、「教職員が作成した教材等をクラウド上で共有」や「職員会議等の資料をクラウド上で共有」等の教職員間のクラウド活用や、「学校徴収金を口座振替、インターネットバンキング等を

活用して徴収」等、毎年度定型的に発生する事務については多くの学校で活用されていますが、「児童生徒への調査・アンケート等をクラウドサービスを用いて実施」や「教職員への調査・アンケート等をクラウドサービスを用いて実施」等の主に外部からの調査や随時実施される調査等への活用についてはあまり進んでいない状況です。なお、保護者との連絡手段については、保護者用連絡ツールを導入しており、アプリによる保護者からの欠席連絡や、学校からのお知らせ等をデジタルデータで配信するなど、利便性の向上に努めています。校務ＤＸに資する各種ツールについて、校務への導入・利用が一定進んでいるものの、各校務単位での活用状況には格差が見受けられます。

また、国・専門家会議の提言において校務効率化の障壁になりやすいとされている「学校外へのＦＡＸでのやり取り」や「各種文書への押印」、「システム等への手入力作業」については、一部の校務において残存している状況にあります。

（２）今後の校務支援システムの在り方検討

各小・中学校においては、京都府市町村教育情報化推進協議会のもと、京都府下において京都府統合型校務支援システムの共同調達を行っていますが、現システムにおいては、ネットワーク分離によるＳａａＳ（ＡＳＰ）型（※１）で運用しており、学習系データと校務系データとの連携ができない現状を踏まえ、今後、各自治体の事例等を参考にしながら、校務系・学習系ネットワークを統合したクラウド環境での校務の実施など、教職員が働きやすい環境や学びやすい環境の整備に向けて検討していく必要があります。

（※１）ＳａａＳ（ＡＳＰ）型の「ＳａａＳ（サース又はサーズ）」とは、「Software as aService（ソフトウェアアズアサービス）」の略称で、ソフトウェアを利用者側に導入するのではなく、提供者側で稼働しているソフトウェアを、インターネット等のネットワーク経由で利用者がサービスとして利用すること（例 Microsoft365 など）。
「ＡＳＰ」とは、「Application Service Provider（アプリケーションサービスプロバイダ）」の略称で、ソフトウェアを実行するためのプログラムデータをインターネット上のクラウドに置き、インターネット回線を通じてプログラムデータにアクセスし、ソフトウェアを利用できる仕組みのこと
（例：校務支援システムなど）

３．校務ＤＸに向けた取組

上記課題等を踏まえ、校務ＤＸ化の推進に向けて次のとおり取組を進めます。

（１）業務を支援するツールを活用した効率化の推進

さらなる教職員の業務の負担軽減を図るため、まずは既存の校務支援システムの利活用について研究・実践するとともに、校務における諸課題（児童生徒とのリアルタイムの連絡や学習状況の把握及び評価の充実、教職員間や学校間の情報共有等）について、コミュニケーションツールやクラウドサービスのさらなる活用を進めることによりペーパーレス化及び効率化を図り、業務改善の取組を推進します。

また、「学校外へのＦＡＸでのやり取り」や「各種文書への押印」、「システム等への手入力作業」のうち、セキュリティ上の配慮（※２）や業務実施の必然性に乏しいものについては、代替手段への移行を検討します。

（※２）ＦＡＸや手入力作業等については、現在でもそれぞれ電子メールによるやり取りや、各種システム・オフィスファイルからのデータ取り込み等で対応している場合も多いが、コンピューターウイルスへの感染やシステムの誤操作等による個人情報の流出を避けるため、意図的にデジタル技術と親和性の低い手段を利用している場合がある。

（２）校務系・学習系ネットワークの統合等

校務系ネットワークの学習系ネットワークへの統合を想定していることを踏まえ、データ連携やセキュリティ対策などについての調査研究を進めるとともに、既存のサーバ、校務端末等の更新時期やネットワーク統合後の組織体制も視野に入れ、取組を進めます。